

【研究ノート】

家計簿から始まった公共活動

——全国友の会の公共活動

千葉大学大学院人文公共学府人文公共学専攻博士後期課程

村上 夫光子

1. はじめに

戦前から90年以上続いている「全国友の会」という消費者団体があることを知る人は少ない。だが雑誌『婦人之友』や「羽仁もと子案の家計簿」といえば、書店で見たことがある人や身近に「友の会」の会員から助けられた、家事について教わったという経験もある。

この団体は、羽仁もと子の創刊した雑誌『婦人之友』の愛読者たちが、1924（大正13）年に「読者組合」を結成し、1930（昭和5）年「全国友の会」となった団体である。「全国友の会」の会員は、2022年の時点で20代から100歳の約15,500人の会員がいる。消費生活協同組合員の組合員を除く、消費者団体としては、最多の会員数であり、女性たちの間では長年、雑誌『婦人之友』を通じ「友の会」の「家計簿」「家事講習会」「友愛セール」「生活展」などの参加で、馴染み深い「友の会」である。

消費者行政の出発点となった戦後の消費者運動は、多くが敗戦直後の混乱を背景に生まれたもので、戦後誕生した消費者団体の運動と「全国友の会」の活動との間には、本稿で明らかにするよう大きな相違がある。消費者運動は衰退したと言われるが「全国友の会」の「家事家計講習会」「友愛セール」「生活展」などは現在も続いている。

戦前からの市民・社会活動として大きな足跡を残したにも関わらず、この「友の会」に関する研究は管見の範囲に留まっている。

「友の会」に関する先行研究については、まず、主に本稿の「2」で取り上げる1930年代の東北セツルメント活動に注目した。特に1935（昭和10）年の「東北農村生活合理化五か年々計画」前後の「友の会」の活動について考察した野本京子の二つの論文（野本2005）と（野本2007）がある。その他に本稿と同様に「友の会」の「家計簿」に注目した研究としては（樋口・近藤2009）や、1930年代に新聞メディアや施策によって支え与えられた東北の農村イメージと雑誌『婦人之友』と「友の会」活動における生活改善思想との関わりに注目し、20世紀後半の東北農村生活改善の取り組みの変遷を明らかにした（渡瀬2009）がある。

このように「全国友の会」の活動に対する先行研究が少ないのは、そのアドバイザーを務めた知識人たちの多くが穏健な思想の持主であり、「全国友の会」自体が外部に向けて声高にアピールや権利主張をするような団体ではなかったことに起因している。

本稿ではこれまで注目されてこなかった「家計簿」の費目の中にある「公共費」に注目し、それに基づいて戦前・戦後と90年以上継続して展開された「友の会」の災害救援を中心とした「公共活動」を考察し、「公共」・「公共性」という観点から、その再評価を試みる¹。

「公共」ないし「公共性」は近年注目されるようになった概念であるが、「公共」という概念が理解されていなかった時代から「友の会」の家計簿の「特別費」の中に既に「公共費」という費目が入っていた。当初は、会員の醸金から、後にはこの「公共費」費目から「友の会」の災害救援を中心とした多くの活動が実行されてきた。

「全国友の会」の災害救援を中心とした公共活動は、政府からの要請を受けた場合もあったが、戦時中の体制翼賛的な、公権力と一体となってその政策を推進するものとは、まったく異なったものであった。その活動は政府と対立する

¹ 「全国友の会」の公共活動の詳細は「全国友の会」ホームページの「公共活動」についての次のURLを参照のこと。<https://www.zentomo.jp/volunteer/>（2023年6月18日確認）

ものではなく、育児相談や生活相談や授産を中心として、むしろ徹底的に女性たちの生活に寄り添ったものである。多くの家庭の主婦たちの「公共費」や参加に支えられ、災禍に見舞われ苦しむ人々への救援・援助を基本とした「下からの公共」であったと言えよう²。

「全国友の会」の公共とは自らが作り出す「公共」であり、その活動もまた、政府や地方自治体などからの資金提供や援助は一切受けることはない。従って活動への制約もなく、会員たちの熟議と決断、計画性に裏打ちされた実行力、そしてすべてはこの醸金や「公共費」で賄われていたのである。災害・飢饉・戦争・震災・台風などこの国を襲った激甚災害の被災者に寄り添い、救援・支援を行うのが友の会の「公共」活動である。これまで注目されてこなかった、このような「全国友の会」の公共活動がいかに、人間性豊かな活動であるかを本稿では明らかにする。

本稿の構成は、以下の通りである。まず2.「全国友の会」の設立と戦前の活動「全国友の会」の設立と戦前からの「公共活動」を取り上げ、特に函館大火や東北冷害の際の救援活動を取り上げる。次に3.「全国友の会」の戦後から現在までの活動では敗戦直後の引揚援護活動から現在までの「友の会」の公共活動を紹介する。

4の「結び」で「友の会における公共」について改めて考察し、結びとする。

なお、資料は婦人之友社、全国友の会中央部、国会図書館収蔵（郷土資料）、当事者の著作物（報告書・オーラルヒストリー）その他、消費者庁、国民生活センターなどを参照利用した。

2. 「全国友の会」の設立と戦前の活動

2.1. 「全国友の会」の設立と家計簿における「公共費」とは。

「全国友の会」は、前述のように、羽仁もと子の創刊した雑誌『婦人之友』の愛読者たちが、1924（大正13）年に「読者組合」を結成し、1930（昭和5）年

² 戦時下の婦人運動に関しては、三井（1974）を参照のこと。

「全国友の会」となった団体である。

1903（明治36）年に羽仁もと子が創刊した雑誌『家庭之友』は、その後『婦人之友』と改題した。1904年の羽仁もと子案『家計簿』創刊は、現在に至るロングセラーとなった。

『家計簿』の特徴は、家庭経済に対する考え方にあり、家庭を経営するという意識を持ち、予算生活の重要性を取り入れていた点にある。

羽仁もと子考案の『家計簿』の費目の中に「公共費」と言う費目がある。現在の羽仁もと子案の「家計簿」にも「食費」などと同じように「公共費」と言う費目があるが、『羽仁もと子著作集』第9巻の『家事家計篇』収録されている1927年10月20日初版の『家計簿』を見ると、それが1966年7月1日新刷発行と同じく、羽仁もと子の家計の考え方で、貫かれていることがわかる。とりわけ第3章「生活費とその予算」をみると、中流家計における一年間を通じた予算の費目として、当初は醸金は特別費という形で家計簿の費目として「公共費」が挙げられていた（羽仁1927、24頁）。

この「公共費」に基づき、公共活動を担う団体となったのが「全国友の会」である。

「家庭は簡素に、社会は豊富に」の羽仁もと子の思想の下に、1923（大正12）年『婦人之友』の読者組合が誕生し、その後、1930（昭和5）年会員数約1,000の時に「全国友の会」が設立された。

第1回全国友の会大会で出された決議文は以下の通りである。

1930（昭和5）年

第1回全国友の会大会 決議文

- * 私共は家庭における封建的個人主義的の気風を清算して愛・自由・協力による新家庭精神の樹立に努力します。
- * 私共は志を同じくする女性の団結によって、愛・自由・協力による新社会の建設に努力します。
- * 私共はこのために各人の有する機会、才能及び労力を惜しみなく捧げること

を約束します。

全国友の会昭和5年11月15日
全国友の会成立をつくるの会 (日本青年館にて)

来賓には、当時東京帝国大学教授で社会思想家・経済学者の河合栄次郎、衆議院議員で弁護士の片山哲、評論家であり哲学者・倫理学者の早稲田大学教授杉森考次郎、ジャーナリストの長谷川如是閑、救世軍運動家で当時日本救世軍大佐補を務め、文部省の最初の女性視学官山室民子、経済史研究家高橋亀吉、社会評論家帆足みゆき、電気工学者で発明家の山本忠興、婦人運動家奥むめを、英文学者斎藤勇、ジャーナリストで文芸評論家の千葉亀雄、哲学者三宅雪嶺、女性参政権運動家ガントレット恒子が招かれた。多くの来賓は『婦人之友』に寄稿する人々であった。「全国友の会」の組織概要が発表され、中央委員には羽仁もと子が選ばれた。

「友の会」の標語は「思想しつつ 生活しつつ 祈りつつ」とされ、(Thinking Living Praying) 「TLP」がシンボルマークとなった。

設立された「全国友の会」は、災害時等に会員以外から寄せられる献金だけでなく、常日頃の家計簿の中から積立している「公共費」から、社会活動を展開していくことになる。戦前におけるその活動を次に見ていくことにしよう。

2.2. 「公共活動」の芽生えの函館大火救援活動

「全国友の会」の会員が支援した「活動」の始まりと言われるのは、1934(昭和)9年3月21日発生した函館大火への救援活動であった(全国友の会2022、23頁)。函館の3月は、寒く雪も降る。その厳しい環境下、市の中心部が被災地となった。当日、瞬間最大風速39メートルの強風にあおられ、市の中心部の2667戸を焼失し、犠牲者は(溺死:917人 凍死:217人 窒息死:143人 その他:29人 その他収容後死亡:112人 合計2,166人)の大惨事となった。

被害の詳細とそれに対する支援を報告する北海道社会事業協会編『函館大火災害誌』(1937年、国立国会図書館所蔵)には、全国各地の「友の会」支援物

資が記載されていた。まず「青森県黒石町友の会」の記載が262頁に遠く海を越えて「朝鮮清津府清津友の会」や「満州国吉林省 吉林友の会 代表寺崎文子」が449頁に記載されていた。何れも多くは「衣類一式」である。453頁に記載されている「静岡友の会」からは「茶2函」が送られており、全国各地からの支援物資の中でも、ひと際目を引いた。被災した人々に少しでも、温かい美味しいお茶で、心を癒してほしいという「静岡友の会」ならではの心遣いであろう。

「全国友の会」が2022年に出版した『全国友の会90年史』には、市役所に届いた慰問品をトラックで配給する会員の様子が掲載されている。火災で18人の「友の会」会員も被災し、その悲惨な状況を電報などで知った羽仁もと子の「函館を助けよう」の一言で、婦人之友社、東京友の会、自由学園学生からなる5人が派遣され「友の会」として初めての救援活動が始められたとある（全国友の会2022、23頁）。

その活動について東京朝日新聞3月26日号の「函館の大火と女性の活躍」と題する記事で火災翌日の23日には函館に到着し休む間もなく、活動を開始した様子が掲載されている（水谷1934）。

本部を会員宅に置き全国から送られる救援物資など『必要なものを必要なところに届ける』というシステムを考え出した。高齢被災者に乳幼児用品が届かぬよう、布団券、衣類券を配布し、配布券に家族や年齢を詳しく書き入れ、1日1区域ずつ引替えとした。

本部は、たとえようのない忙しさだったが、ちょうどよい必要なものが配給されるようになった。最初は「友の会」宛ての救援物資だけを扱っていたが、全国各地からの救援物資が函館駅に山積みとなり、函館市は配り切る方法もなく、困り果てた時に「友の会」の仕事ぶりが伝わり頼みに来られた。被災者に工賃を払って布団作りを依頼していたことなど如何にも「友の会」らしいと「函館友の会」の平塚千鶴子は記述している。

この「配布券」方式は、1923（大正12）年の関東大震災後に、自由学園を訪れた、メアリー・ピアードの助言に依るものである。メアリー・ピアードは

歴史家・都市計画専門家チャールズ・ピアードの妻であり、夫チャールズが後藤新平に招聘され共に来日した女性の歴史家・活動家である。メアリーは「東京連合婦人団体」にも参加していた自由学園の生徒らのミルクの配給にも、足を運び直接支援活動に携わった。彼女が助言した「配布券」方式は、今に続く「友の会」らしさの、無駄のない合理的な支援方式となった。

本部は、たとえようのない忙しさだったが、ちょうどよい必要なものが配給されるようになった。最初は「友の会」宛ての救援物資だけを扱っていたが、全国各地からの救援物資が函館駅に山積みとなり、函館市は配り切る方法もなく、困り果てた時に「友の会」の仕事ぶりが伝わり頼みに来られ、また被災者に工賃を払って布団作りを依頼していたことなど如何にも「友の会」らしいと「函館友の会」の会員で当時自由学園高等科1年に在学中であった平塚千鶴子は記している（全国友の会2000、53頁）。

その後、この被災者支援プログラムは、現在に至るまで友の会のさまざまな支援活動に活かされていくことになった。

この時の経験をいかしながら、より大規模な災害における被災者支援を「全国友の会」が関わったのが1934年の東北の大凶作に対する支援活動であった。次にこの活動を見ることにしよう。

2.3. 東北冷害から「東北農村合理化5か年計画」へ

1934（昭和9）年、東北は大凶作に見舞われた。その際に「友の会」が展開した長期の支援活動・公共活動は、我々に今後起こりうる「激甚気象災害」の被災者支援への在り方について、大きな示唆を与えてくれている。「全国友の会」は、函館大火の時の活動を更に進化させていく。

今も「ボランティアによる活動」などでは、長期に渉る支援は、財政的にも難しいと言われている。それでは「全国友の会」は、如何にして長期に渉る支援活動が、可能であったのか。それは入念な準備による計画と「醸金」、現在の「公共費」であった。

「全国友の会」の会員向け会報『友の会レポート』及び『友の新聞』には「公

共費」についての記事が掲載されてきた。1935（昭和10）年の東北地方の冷害に際して『友の会レポート』は1935年12月2日付けで「凶作地の友を助けましょう」という表題の記事を掲載し、我らが何をすべきかを問いかけた。これを受け全国からお見舞いの金品が中央部に集まり、直接的な救援活動は東北地方の友の会が土地の実情に合った方法ですることになった。それを県、市、町、村を通じて困窮者に寄贈したところが多かった。

しかし、この経過の中で次第に凶作地の実情についての認識が深まり、生活指導や失業者・貧困者などに仕事を与え、生計を立てさせる「授産」の必要性にも気づき始めた。やがてそれは羽仁もと子の提案した東北6県にセツルメントを開設する五か年計画、「東北農村合理化運動5か年計画」となっていった。

この計画の実施にあたり、資金として一日一銭醸金が提案され会員外の読者を加えて全国的な醸金が始まった。醸金は、続いて行われた出征兵士の親族つき合い、北京生活学校の経費、終戦による引揚援護事業をも支えた。『婦人之友』昭和14年6月号「奉仕部会計報告」182-23頁には、会員からの「一日一銭醸金」や奉仕部寄付の会計報告と共に「一日一銭醸金」新加入者の名前が、北は弘前から、平壤、清州までが掲載されている。

羽仁もと子を中心とした東北の大規模冷害に対する被災者支援策である「東北農村合理化運動5か年計画」はどのような経過をたどって実現されていったのか、これを確認しておこう。

「全国友の会」の公共活動は、支援物資を配り、義援金を贈るだけで終わらない。「全国友の会」は闇雲に計画性もなく、支援に入っていた訳ではない。支援のための事前の現地調査や各地の「友の会」に情報提供を呼びかけ、救援活動の報告を「全国友の会中央部」に集め、分析検討したその結果、「全国友の会」としての方針を決定している。

幾つかの支援のための調査や救援活動から、学んできた経験智（知）があり、それを更に重ねていったのである。それは以下のように、周到な4つの準備段階を踏み、最後に「東北セツルメント計画」に引き継がれていった。

第1段階として、この東北支援の前、婦人之友社が秋田県に、2名の記者を

取材のために送っていた。田中孝江・松井美恵子の両記者は、秋田県直根村（現・鳥海町）の農家に泊まり込み、寝食を共にし「東北凶作一寒村に住む」と題する記事を『婦人之友』1934年12月号に掲載した。

次に第2段階として、「全国友の会中央部」から松岡久子が初冬に東北地方を巡回視察している。引き続き東北地方各地の「友の会」から知り得た情報とともに、各地の友の会としての情報とともに、各地の友の会としての対策案を中央部に集めた。そして1935（昭和10）年3月14日「更生学生服の展示会」を明日館（自由学園旧校舎）で開催した。あり合わせの布を面白くはぎ合わせたり、アップリケでつぎを当てたり、どれも頭と心を動かして工夫に富んでいて、古着からできたと思われないものばかりだったと言われている。

自由学園の学園関係者のほかにこの運動に関心を寄せてくださるお客様も招いて見ていただいたと言う。

その中のひとり、当時東京帝国大学教授を務めていた経済学者・農政学者の東畑精一は「これ自身が一つの工芸になっている」と評価していた。また内務省社会局保護課の堀田健男の「近頃東北は、乞食根性が養われそうだと問題になっている。友愛セールは良い方法だと思う」との言葉が残されている（全国友の会、1989、14頁）。

第3段階として、全国からの見舞の金品を中央部に集め直接的な救援活動は東北地方の友の会が土地の実情に合った方法で支援することになった。

全国から集まった見舞金から850円と品物が東北地方の九つの「友の会」に送られ、各友の会はそれを県・市・町・村を通じて困窮者に寄贈したところが多かったとされる。

支援の準備のための第4段階として、しかしこの経過の中でしだいに凶作地の実情について認識が深まり生活指導や失業者・貧困者などに仕事を与え、生計を立てさせる「授産」の必要性にも気づき始めた。盛岡友の会は、1村を定め徹底的に救済の道をつけたい、農村生活相談所というようなものを開けないかと考えた。それに備え昭和6年の凶作の折に給食などをした縁のある岩手県二戸郡（田山村）、（現在の安代町）を選び、生活実態調査をおこなった。それ

が生活実態調査報告書『田山村の生活』である。

生活実態調査報告書『田山村の生活』は、昭和8年創立されたばかりの「盛岡友の会生活学校」の生徒35名が、1932年に自由学園を卒業後「盛岡友の会の」会員となり、盛岡に生活学校を創設した吉田幾代をリーダーとして、暮れの12月26日から2週間、年を越して田山村に泊まり込み、村民の衣食住全般について行った詳細な生活実態調査である。腰まで積もった雪を踏み分け、夜は提灯を灯して全部落の農家を訪問した。若い娘たちを信頼し村人もそれに応じてくれた。家の間取りや使用状況、食事の種類や量、衣類については肌着や履物の数に至るまで、その他衛生、冠婚葬祭、教養娯楽などにわたって調査記録をした。この調査にあたっては、岩手大学根本二郎教授その他の指導協力も大きかった。

この詳細な報告書である『田山村の生活』について、東畑精一は、後に『婦人之友』1950年4月号の「生活の上に築かれた学問：自由学園第28回卒業式にて」という記事の中で「日本では調査といえば、多くは男の人がするために、なかなか家の生活の中に入り込んだ調査というものがないのですが、田山村の調査は農民の生活の細かいところまで入り込んでなされた詳しい調査であって、その後今日に至るまであれだけの調査は日本にはまだありません。」(24頁)と高く評価している。

この年(1935年)の8月に羽仁もと子は病に倒れたが、12月最後の中央委員会に元気な姿を見せた。そして考えに考え抜かれた東北地方の救済について具体的な計画を提案した。それが「東北農村合理化運動」である。当時友の会は、1930年の第1回大会により「全国友の会」が結成されてから5年目(友の会数151うち外地34)会員数5,484名という時代であった。

羽仁もと子は既に『友の会レポート』第38号に「凶作地に対する我らの奉仕として食べ物のごときはいくつかの婦人団体がやったださるようだから、友の会は着物の方を引き受けよう」との考え方を示し、『婦人之友』1935年2月号に「家族日本を作りましょう——東北農村の再生を助けて——」と題した記事を掲載し、セツルメント計画を提案した。それが結実したのがこの「東北農

村生活合理化運動五か年計画」であり、この計画は、一時的援助ではなく自らの手で日常生活やその元となる精神生活をも進歩させ自立できるような救済活動を目指したものであった。

岡田直子によるここで展開された東北農村合理化運動については以下のような報告がある。「友の新聞」235号(創立40周年記念大会)には東北農村合理化運動についての報告。

友の会中央と東北6県にある友の会は、緊密な連絡を取って活動を始めました。

東北6県に各々1か所、最も貧しい農村の最も貧しい家庭の主婦10人を6か月間毎日セツルメントへ通わせて『子供読本』による読書、手縫いの洋服を下着から勉強、昼食は当番2人がつくる。一日20銭の工賃とし、10銭は衣食引換券で渡します。その券がたまったら、食料品、ふとん布、自分たちで作った子ども服一揃えを80銭で買えるという仕組みです。

指導者は自由学園の卒業生や友の会の青年班の人たちが1箇所3、4人ずつ各地からこの不毛の地へ入って不便な生活に耐えつつ、おばさんたちと生活を共にしたのです。

第1の仕事はセツルメント開設の定まった村の貧しい家庭の、新入学児童の洋服一揃えを作ることでした。全国各地の友の会が制作を受け持ち、中古品から上着や下着を作り、それらを入れる整理袋にハンガーまで添えたのです。わずかな日数で400人分の洋服ができました。村で一番汚かった子どもたちが、可愛らしい洋服で登校するというので、4月1日の入学式は大変なものでした。親たちはむろん村の多くの人々がその姿を見ようと学校へ集まってきたのでした。ぼろの重ね着をさせられて、胸も裾もはだけ胸元や袖口のべっとり光った服装をしていた子どもたちが、清潔で活動しやすい洋服になったことから村の衣の改革が始まったのです。これは村中の話題となりセツルメントへの関心が深くなった第1歩でした。

当時の冬の東北の男たちは、農閑期には出稼ぎで、留守は女子どもと、年寄り達だけである。寒く凍れる東北の冬に、継ぎ接ぎだらけのボロを纏った我が子たちの服を、こざっぱりした洋服（学生服）、ワンピースなどを縫って着せることを目標に、支援活動は始まった。

「友の会」会員の指導を受け、手縫いのための運針・ミシンの使い方などを教わり、我が子の服を6か月で、縫い上げ終了となるが、その後は制作部員として、働き収入を得ることができるようになっていく。

それは教育プログラムでもあった。東北農村の最も貧しい家庭のおかみさんたちが6ヶ月間毎日通って『子供読本』（羽仁もと子著）を読み、裁縫、食事作りなどの家事を学んでゆく、カリキュラムである（全国友の会 2022、24-25 頁）。

さらに「友の会中央本部」では、東北のセツルメント支援のため、各地の「友の会」へ指導者を派遣していた。この活動実績から「公共活動」支援のパッケージが完成したと言われる。

このセツルメント運動五か年計画が、1939（昭和 14）年に終わり、卒業生のおばさんたちは自発的に一人一人決心して「農村友の会」の誕生となった。

「農村友の会」のその後が、『婦人之友』昭和 14 年 6 月号に「真情溢るゝ農村友の会員のたより」158～161 頁に掲載されている。「いろはを習って初めて書く」をはじめ、全文ひらがなで、しかも方言そのままに書かれているが、文字を読み書き、自ら考え、東北の女性たちの生活を建て直す喜びが、その文章の中に溢れていた。

この活動に携わった吉田幾世は、その後「上野の浮浪児」の救済にも関わり、その意思は今もなお学校法人「スコール」に受け継がれている³。

そしてこのような活動をした「全国友の会」は、戦後、とりわけ敗戦直後にも活動することとなる。次に、「友の会」が携わった戦後の引揚援護事業と公共活動を中心に見ていくこととしよう。

³ 学校法人スコールについては次の URL を参照のこと <https://www.schole.jp/history/> (2023 年 1 月 14 日確認)

3. 「全国友の会」の戦後から現在までの活動

3.1. 引揚援護事業

祖国の敗戦の中で、「全国友の会」が担わなければならなかったのが「引揚援護事業」であった。1945（昭和20）年の敗戦による連合軍の占領政策の下、焦土と化し荒廃した国土に外地からの引揚げ者が帰国する。1945年には350万人が帰国。日本への引揚者は1950年までに625万人にも達した⁴。

この「引揚援護事業」を直接担当した政府機関が引揚援護院である。引揚援護院⁵の業務（内地以外の地域から内地に引き揚げる者、および内地から内地以外の地域へ引き揚げる者に対する応急援護・検疫業務）および復員庁の業務（旧陸海軍の復員およびこれに関連する事務）を統合して所掌するものであり、中央機構に長官官房、援護局、復員局、地方組織に地方支分部局が置かれた。初代長官は斉藤惣一が務めている⁶。

そしてこの復員事業において、実際の人員の運輸作業を担ったのが復員船であり、この復員船の寄港地は佐世保、博多、鹿児島、下関、仙崎、呉、舞鶴、浦賀、函館であり、政府はこの各都市に地方引揚援護局を設置した。「岸壁の母」「異国の丘」の歌碑もあり、国民には舞鶴港が広く知られている。舞鶴港へは延べ346隻の引揚船が入港し、総数66万2,982人が舞鶴港に上陸していたが、シベリア抑留者が多かった。首都圏に近い横浜市浦賀へは（約54万人）が上陸していた。なお、最も引揚者が多かったのが、博多であった。一般邦人・旧軍人など139万人の人々が博多港に引揚げてきた。また当時、在日の朝鮮や中国の人々約50万人が、博多港から故国に帰って行った⁷。このような状況の中で、

⁴ 戦後の引揚については、国立公文書館アジア歴史資料センター「公文書に見る終戦——復員・引揚の記録——」（<https://www.jacar.go.jp/index.html>）（2023年8月10日確認）を参照のこと。

⁵ 勅令第130号「引揚援護院官制」に基づき厚生省の外局として設置。

⁶ 日本キリスト教青年会（YMCA）同盟総主事

⁷ この点の詳細については公益財団法人亀陽文庫「能古博物館」の下記URLを参照のこと。<https://nokonoshima-museum.or.jp/index.html>（2023年8月10日確認）

「引揚援護事業」を担っていたのが「友の会」であった。1946年8月「引揚者との親戚づきあいを始めたし、様子知らせよ」との羽仁もと子からの電報に答えて「福岡友の会」は援護局によって開所された引揚げ孤児収容施設「聖福寮」にて孤児の養育に着手した。また引揚者のなかには、途中で親と死別し、無縁故者となった幼い子が多くいた。

家族を失い栄養失調で上陸してきた生後1ヵ月から18歳の子どもたちのために7ヶ月にわたって昼夜を問わず世話を続けた。当時の写真には、まだ生後数か月のいたいけな乳飲み子もいた。昭和21年博多港に大陸より孤児たちが、続々上陸するようになった。引揚は幼い子にはとりわけ過酷で、4歳位までの年齢の子は、帰還途中に多くが亡くなっていた。

当時、自由学園を卒業後、福岡女学院の教職にあった石賀信子は、職を辞して孤児のために働くことを決意し、彼女を筆頭に「福岡友の会」の会員はじめ10代から20代の女性たちが、各地からこの引揚げ孤児収容施設での事業に参加した。その活動は、この施設で医療活動をしていた父親の下にいた朝山紀美が、『婦人之友』2020年8月号に寄せた文章「[平和特集・戦後75年]語り継ぎたい“聖福寮”のこと——博多：引揚げ孤児との日々」に克明に描かれている。

『婦人之友』1946年9月号に掲載された石賀信子・福岡友の会青年班「引揚援護事業報告——子供らの家聖福寮開く」と題する報告には、以下のような博多に引揚る子供たちの援護をするに際しての石賀の心情、決意が29頁から31頁に書かれている⁸。

博多港に大陸よりの孤児たちがぞくぞくと上陸するようになった。

同じ子供でありながら、唯海外に在ったために、今日一倍戦争の痛手を身に受けて、故郷に帰ってくるこれらの孤児のために、私どもで出来ることがあったら何かしたいと言う願いを強く持つようになった。漠然とした

⁸ 『西日本新聞』2020年10月20日号石賀信子や聖福寮についての記事や、晩年の石賀の様子も掲載されている。その記事については下記URLを参照のこと。<https://www.nishinippon.co.jp/item/n/655975/>（2023年9月7日確認）

その願いが「全国友の会」の会員や愛読者の方の後盾によって励まされ計画づけられて、大きなお仕事が与えられることになった。

上陸を終えた200数十名の子供たちは、港の大きな倉庫の中で検疫のすむのを待っていたが、思ったよりもみんな元気そうに見えた。長春より博多までの長旅をこの多勢の子供たちの父母ともなって連れて来られた班長の方々にお目にかかり、その御苦勞を思うと胸が詰まるようであった。その日上陸した子供たちは満州の奥地から長春まで逃れてきたもので、開拓団の子らも混じっており、父親は大抵現地招集か終戦後行方不明となったり、母親は旅の途中で発疹チフスや結核などで倒れたものである。すでに長春において宗教団体関係の3つの保育園で相当の期間養育されてきたのもので、健康もある程度回復しているし、団体生活にもかなり慣れているとのこと。彼等はいつかは父親に逢えるという希望を持っているので子どもたちの前では決して孤児という言葉を使わないようにしているとのことだった。

ひとりの班長さんは日に焼けた顔いっぱいの汗を拭おうともせず、ともかく日本に帰ってきてどんなにうれしいかを語られ「ただ心にかかるのは今日まで親子のようにして連れてきたこれらの子供達とこの港で別れてしまうのか。この先子供たちがどこまで連れて行かれるのか、どんな所で暮らすのか心配です」とおっしゃった。

赤ん坊は3歳より下の子供は1人もいないとおっしゃった。「赤ん坊は母親のお乳が出なくなった時、殆ど死にましたし、それに母親の死出の道連れになった可哀そうな子供たちもあるのですよ」と班長さんは語られた。これ以上の悲惨なことがあるのだろうか。4人兄弟でありながらコロ島で船を待つ間に3人も死んでしまい、たったひとりになって帰ってきたという子供もいる。これらの子供の中どれだけが新しい聖福寮に来るのかは、分らないけど、強く生き抜いてここまで帰ってきた子供ら！「引き受けました。出来るだけのことはいたします」と答えないではいられなかった。

小母さん、僕ね、もう漢字は大抵忘れてしまったらしいよ。だって一年

以上も学校に行かないんだもの」という 11 歳の男の子。「あなたは何年生」と聞くと「本当は女学校だけど」という 14 歳の女の子もいる。本が読みたい。勉強がしたい。お裁縫がしたいというこれらの子供たちのために早く良い勉強法も考えてあげたい。

今度の子供たちは今までの引き上げ孤児に比べるとかなりたくさん荷物を持って無事に持ち帰っている。ぎっしり詰まったそのリックサックを整理して満州から一度も洗ったことないらしい汚れた冬服など段々洗濯してやることにも。昨日は児島さん、今日は家庭班の伊藤さん、円城寺さんが午前中かかって洗って下さった。途中でひどい下痢をしたため足のたたない 4 つの女の子はさちこと言って、7 つの姉さんと 9 つと 11 歳の兄さんの 4 人兄妹である。北のほうの田舎から昨年 9 月に長春に逃げてきたのだそうだ。さちこちゃんのリックサックを整理していると、一番底のほうに黒い布に包んでしまったものがある。開けてみるとお宮参りのときに着たものか、真っ赤な長袖の晴れ着や真っ白なベビー服、新しい下駄、ぬいぐるみのお人形、腹巻をかねたお金入れなどが出てきた。「このお人形はね、お母さんが作ったんだよ。さちこがね、これだけを持っていくって聞かなかったんだよ。この腹巻はさちこのお金で、これを腹に巻いて逃げただけでもういらぬね」9 つ上の兄さんが側で説明してくれた。かなり良い家の子どもたちだったのだろう。たった 1 枚の下着も心を込めて縫ってくれた亡くなられたお母さんの面影が偲ばれるように思われた。

ある子供はハンカチーフに包んだ小さな白木の箱をリックサックの横にちょこんと置いている。途中で亡くなられたお母さんや弟妹の遺骨なのだ。お母さんが亡くなる間際に首にかけてくれたというお守りをもった子もいる。

2 度目の入浴の様子には、子供たちの通った苦難の道がしみじみわかったような気がした完全に骨と皮ばかりの子供、全身疵だらけの子供、大きなおでき、あちこちただれ真っ赤な目。疹〇〇（判読不能）等等安心して体をこすってやれる子供は 1 人もいない。満州からの汚れは痩せこけた皮

膚のしわの中に深く染み込んでいつ取れるとも知れない。

やがてもう1カ月もすればこの中の半分かそれ以上はきっとそれぞれのところに引き取られていくに違いない叔父さんかおばさんかどういふ人が子供達を連れに来るのだろう。この中の幾人かはいつの日か父親にめぐり逢うこともできるだろう。この聖福寮で暮らす日はわずかであっても、故国での最初の生活がこの子供達にとって、心身の疲れを癒し新しい希望を持たせるところのもので、あるようにして行きたいと思う。

しかしこのような活動にあたり、「友の会」会員の個人名が、表に出てくるのは「活動報告」を『婦人之友』に掲載するとき位である。

着の身着のまま、引揚して来た人たちへの支援は「全国友の会」が、授産経費を全て負担して、実施されていた。この経費もすべて、「友の会」会員からの醸金によるものである。

当時の『婦人之友』1946年7・8月合併号の12頁には、引揚者の新生活の出発に向けた無料の洋裁講習会の募集広告が掲載されている。

この「全国友の会」の引揚者への支援活動の中で、多くの民間人、とりわけ女性を対象とした佐世保における過酷な引揚援護活動がある。

終戦後、海外からの引き揚げ者に関して、舞鶴港は良く知られている。舞鶴は「復員船」の帰港地であるが、シベリア抑留者を受け入れてきた。旧陸軍軍人。シベリア抑留からの帰還兵などで、引き上げ後の事務手続きなども、システム化されていた。旧満鉄職員とその家族たちの多くは、博多に上陸していた。

これに対して福岡県二日市町にも、帰還者の救護施設があった。さらに佐世保は博多に次いで、引揚者が多かった。南方からの引揚が多く、軍人よりも一般邦人が多かったことである。佐世保へ帰還した人たちは、その帰りを待つ「岸壁の母」もおらず、寄り辺ない人たちではないと言われる（森崎 2016）（山崎 2008）。

1946（昭和21）年2月引揚援護院の齊藤惣一長官から羽仁もと子（友の会）への依頼により、「佐世保友の会」へ電報があり、佐世保援護局を訪ね「佐世保

友の会」は引揚援護局の委託を受け「婦人相談所」の任にあたった。より具体的には設置された「婦人救護相談所」での支援を担ったのである。国は、博多・佐世保に引揚げ港に「婦人救護相談所」を開設して、引揚げ女性の相談業務を行っていた。性病の日本への伝播の防止と性暴力被害女性の妊娠中絶が目的である。「婦人救護相談所」は、他にはみられず、「上陸した女性は相談所へ」という文書も配られていた。「婦人救護相談所」では、10歳以下の少女を除く70歳までの女性すべてが対象⁹となった。故国にたどり着いた女性の、なお癒されぬ傷に寄り添い、励ますことが求められていた。

この佐世保の相談所の支援活動について、67支部から350人が出席し、自由学園で4年ぶりに開かれた1946年度の「全国友の会」大会にて、羽仁もと子は「東北セツルメントや、北京学校に続いて、今年度は「全国友の会」の仕事として「佐世保友の会」を助けて引揚援護の仕事をしたい」と提案し全会一致でこの提案は承認されることになった。

「全国友の会」大会直後から「全国友の会」として佐世保の「婦人救護相談所」と佐賀県中原診療所の支援活動が始まった。この二つの機関は1948年閉所となり、さらに博多引揚援護局閉鎖に伴い、1947年2月「聖福寮」は閉寮、その後生活困難な母子のための宿泊託児所「聖福子供寮」として支援を続けた。

友の会の「活動」は、敗戦後外地からの引揚者への外地からの引揚援護事業でも、心を寄せ続けた。「引揚者」の苦難、特に女性相談についての報告は、内地にいた人々は知る由もなく、戦争の悲惨さ、心身への過酷な被害は女性を受けられるばかりであった。「婦人救護相談所」には、支援員以外の人々からの、好奇の目からも「女性引揚者」を守らねばならず、気の休まることはなかったであろう¹⁰。

引揚者の多くは、栄養失調や下痢・皮膚病、敗戦の失意と迫害のため、疲労困憊であつた。引揚者は、上陸と同時に DDT 散布消毒を浴び、検疫後7キロ

⁹ 女性の対象年齢が、記録により異なる。

¹⁰ 引揚者の内訳については浦頭引揚記念資料館のホームページの下記 URL を参照のこと。<https://www.city.sasebo.lg.jp/siminseikatu/simian/uragashira.html> (2023年7月19日確認)

の山道を歩き、引揚援護局までたどり着き、引揚手続きを終えると衣服や日用品の支給を受け、2・3泊後、南風崎（はえのさき）駅からそれぞれの故郷へ向かっていった。

浦頭引揚記念資料館「年表」によると、1946（昭和21）年1月より、これまでの列車輸送は、不定期臨時列車で、客貨車混成で、門司行きが2本だった。この年から品川行1本、大阪行き1本、門司行き2本の4本となる。輸送能力は1日6千人程度であった。

引揚援護局が「友の会」に応援を求めた頃は、佐世保港の引揚者収容者にコレラ、チフスが発生するなど劣悪な衛生環境に、引揚者は置かれていた¹¹。

12月には大連からの引揚第1船も入り、約3,000名が入港していたが「友の会」が本格的な活動の頃には、麻疹や腸チフスの患者も発生していた。

一般人が約半数であり、引揚者は、軍人であれば上陸後、未払い給与・恩給等の諸手続きがシステム化されていた他の引揚上陸地とその後の様子が違っていった。

当時の状況について『婦人之友』1946（昭和21年）6月号（37頁）の「佐世保 博多に還る人々——女性の手をまつ引揚援護事業の一分野——」に西村二三子は、次のように書いている。

ご相談を受けつついつも心が痛むのはお気の毒なその服装でございます。

赤ちゃんのおむつがなくて着ている着物の片袖をちぎってようやく用に当てていた方、途中暴徒に襲われて、荷物はおろか、着ていた肌着まで剥ぎ取られ、ようやく恵んでもらった麻布にかろうじて肌を覆って帰ってきたというようなひどい方すらあって、このまま故郷へお帰しする事には忍びない気が致します』と訴えられたことに対して各地の代表者から「それは私共が力を出してみましよう。本当に罹災した者ですら2枚のものは1枚にして差し上げなくてはならないと思います」と涙を持って答えられた。

1週間経つか経たぬ間に、早くも中央部へは「東京友の会」の3000点を

¹¹ この点については前掲浦頭引揚記念資料館のホームページ URL の「年表」を参照のこと。

はじめとして各地から続々と心のこもった荷物が届き始めたのであった。真新しい下着や浴衣、石鹸や手紙を添えた贈物、小さくなった子ども服に刺繍を加え、つぎ糸、布までつけたもの等々、1つ1つが友情のしるしとして、見る者の心に触れる品々である。

5月21日桐渕とよ氏と共にその荷を携え佐世保へと旅立った。

当時、東京から佐世保へ行くには、東海道本線・山陽本線と乗り継ぎ、更に門司・博多・江北と乗り換え、佐世保に到着するのだが、大きな荷物を抱えて座ることもできず、立ったままの車中泊で、片道1泊2日掛かったのではないかと推測される。その年、品川－佐世保間には、1日1本の直通列車のみである。

引揚者や買い出しの人々急増し、列車は想像以上に満杯の混雑だったであろう。明日館は免れたが、空襲で「全国友の会」も被災していた¹²。誰もが苦しい時代であった。着の身着のままどころか、全てを失い帰国した人々へは、その後も、自立支援を続けていた。

全国友の会（2000）『全国友の会 70年の歩み——会員がつづる創立から現在まで』には、「佐世保友の会」の西村二三子による、次のような佐世保の過酷な支援の様子が綴られている。

家庭人でしかない私共は驚きと不安と自信のなさで容易に決心がつかねたが「友の会」へのかけられた信頼を思い、また「この大きな国の憂いを「友の会」の心で食い止めてください」と頼まれると、ついに引き受けざるを得ない結果となったのである。

仕事の内容は人種の違う者から受けた性病は悪質であるために、今後亡国病ともなる危険を未然に防ぐための対策で、これを生活相談とともに「婦人相談」のかたちで行い15歳から55歳までの婦人は、1人もれなく相談

¹² 食糧のみならず、衣服も配給「衣料キップ」で、購入しなければ手に入らない誰もが苦しい時代であった。

室を通らねば「引揚証明書」がもらえぬ仕組みで、厳しい規制の下に私どもは援護局委託の資格で「婦人相談所」の看板を掲げて発足した。

さらに西村による「友の会」の支援らしい様子もつづられている。

引揚船から上陸する婦人3、400人をまとめて広い板敷に座らせ、性病の恐ろしさを話し、凌辱を受けた人、性病の懸念のある人、非合法妊娠で悩んでいる人は遠慮なく申し出るようにと話し、その後は各室に分けて極秘に、しかも1人も漏らすことのないやり方で事情を聞き、1は犯された人、2は性病、3は妊娠と定めた記号を書いた紙を渡し、部屋の入り口にいる連絡員がそれを見て局内その他でそれに応じた処置をすることになる¹³。

性病や妊娠の人は当分帰郷することができず、佐賀県の元陸軍病院や中原診療所に入れられました。その人達の生活と授産の指導の必要に気づき、局と話し合い、廃品となった軍服や毛布を譲り受け、洋裁で婦人服、子供服を、その裁ち屑で六枚はぎ帽子をまたその裁ち屑でぬいぐるみの動物などを制作し、帰郷に備え収入となるように考えた。

与えられるばかりではなく、自ら動くことで、心身ともに、回復していく。この授産指導も「友の会」の家事講習で鍛えられてきた、個々の会員の家事力の凄みとしか、言いようがない。

さらに満州引き揚げは1年で終わり、同時に中央部や全国友の会の援助も閉じられた。だが婦人相談所は続いて開所していた。大連引き上げのためにさらに延長され、満州の時と違った問題にも色々と遭遇し、血なまぐさいリンチ事件なども起こった。

婦人相談室は、特に婦女子を守る立場を明らかにして、乳幼児を抱えて帰郷するまでの諸問題や病老人の過度の使役の押し付けを、さばいたりする時には、身の危険を感じながら、局との架け橋となった。婦人相談所は

¹³ 事前に昭和21年4月付で「引揚婦女子の皆様へ」と題する文書が「厚生省医療局・国立病院・国立療養所・厚生省引揚援護院・地方引揚援護局」の連名で配布されていた。

無事 2 年近くの仕事を終えて、1948（昭和 23）年に閉じられた。（全国友の会 2000、32-5 頁）

過酷な引揚の検疫所や援護の舞台となった一帯は、現在ハウステンボスの一部になっているが、このような悲惨な時代があったことを決して忘れてはなるまい。

3.2. 食糧不足の時代から現代へ

1945（昭和 20）年の敗戦による連合軍の占領政策の下、荒廃した国土に外地からの引揚者が帰国する混乱の中で、戦後の国民生活は始まった。その中で生活物資の不足は食料品を始めとしてあらゆる物に及んでいた。

深刻な食糧危機とインフレーションの激しさは「ヤミ市」を出現させた。当時の物価については、『現代日本経済の展開——経済企画庁 30 年史』によると、白米 1 升（1.5 キロ）70 円で 1935 年の 132 倍に達したのである。昭和 9 年～11 年を 1 とした物価は、昭和 20 年には 3 倍に、21 年には 19 倍、22 年には 51 倍、23 年には 150 倍、24 年には 248 倍にも上昇していった（経済企画庁 1976、18-23 頁）。

特に戦前も戦後も、激しいインフレと物資の不足、配給も乏しく、子どもたちは、栄養失調となり、生命の危機に瀕していた。そのような人々への支援を、変わらず行っていた団体が「友の会」であつた。

「広島友の会」¹⁴「長崎友の会」は、原子爆弾により、壊滅的被害を受けていた。「広島友の会」はその後、復興を経て現在も活動を続けている。「長崎友の会」は、壊滅的な被害の上に、戦後の引揚援護事業などの活動も担っていたが、その負担の重さは、相当な重圧との闘いの日々であったであろう。

そんな中で「全国友の会」の活動を支える「公共費」の充実が図られることになる。

¹⁴ 1930（昭和 5）年設立。8 月には「平和例会」が、開催される。

「一日一銭醸金からわれらの公共費」へとなる。醸金から始まり、幾多の変遷を経て「公共費」となっていった。それは戦後においては1948年(昭和23年)の当時都会に比べて立ち遅れの見られた農村生活の向上を助ける運動が全国的に行われ、それを支える1日1銭運動の発展として始まった「農村文化運動醸金」が始まりとなる。

やがて1955(昭和30)年「友の会」創立25周年記念事業のひとつとして「教育醸金」が始まる。当初は農村生活文化運動を含めて広く教育事業のためにと1ヵ月1口5円であったのが次第に会員の気持ちが高まり1人平均2口半の醸金となった。

そこから年を追って各自の家計の中の公共費を増やそうという声があちこちに起こってきた。そしてその後の経緯については『友の新聞』1967年5月12日号の「われらの公共費」という記事が詳しく伝えているが、従来の教育醸金の目的を一層充実するとともに、台風、地震などの災害救援のために、また社会全般のために尽くしたいという熱意から醸金の目的を1日1円にという案が1964(昭和39)年の大会に取り上げられ、一同の賛成を得ると同時にこの年から名称も「われらの公共費」と改められて今日に至っている。戦後、全てを失い、引き上げてきた人々たちへの支援も公共費(醸金)で賄われてきたのである。

その成果は、醸金や公共費によって運営された洋裁講習会に見ることができであろう。この洋裁講習会の様子については、『婦人之友』1946(昭和21)年7月8月合併号63頁の『婦人之友』の編集後記にあたる「編集室日記」の欄に掲載された「友の会の講習会」と題する次のような記事に見ることが出来る。

7月25日木曜今日は洋裁講習会の最終日お昼食には110余人の講習生が親しい心持ちで語り合う。勤務先の了解のもとに会社に働きながら出席し、時間を実に上手に使って3ヶ月間に45点縫い上げた娘さん、また戦争未亡人になり洋裁によって生計の道を立てたいとわざわざ田舎から出て来られた方もある。講習生の1人である矢島博士夫人は朝鮮からの引き揚げ者、生計の助けにと持って来られたミシンがさっそく役に立ち、講習が終

わって始めるつもり隣の洋裁講習が、皆さんが待ちきれずとうとう夫人が習って帰っては、そのままお家の講習会になっているとの報告もあった。これからも研究の日を決めて集まりたいという希望の声も頼もしい。

戦後、学校法人による「洋裁学校」は、再開されていたが、今に続く「友の会」の洋裁教室は、講習会の費用も安価で、確実に収入に結びつき、リフォームまで教われる教室は、貴重な存在である。

現在においても、羽仁もと子案『家計簿』は、手書きの記帳にこだわる人々の為、毎年年末近くには、書店に平積みされているので、知る人も多い。現在は『クラウド家計簿/家計プラス』『kakei+』が発売となっているが、変わらず「公共費」の費目はある。

現在の「全国友の会」における「公共費」は、家計簿の「公共費」を会員たちが積み立て「公益財団法人全国友の会振興財団」へ寄付を行い、この同財団が「全国友の会」の活動を財政的に支援するという形をとっている。同財団は1962年（昭和37年）文部大臣の認可を受けて設立された。以来「全国友の会」の活動を助成し、その拠点である全国123箇所にある友の会館の土地、建物の管理、運営を続け今日に至っている。2011年（平成23年）公益法人として認可を受ける。

事業は、①友の会館の設置、管理、運営②全国友の会の行う事業への助成、援助③その他の援助助成*内外の社会福祉団体への醸金*内外の災害発生に即応して義援金の醸出④その他目的達成のための必要な事業とある¹⁵。

最近では、トルコ地震のように、現地で「全国友の会」の公共活動が困難な場合は、現地に拠点があるか、直接支援に入る団体へ支援金が送られている¹⁶。

現在、「友の会」の会員になるためには「全国友の会中央部」に連絡すると、

¹⁵「公益財団法人全国友の会振興財団」については、下記 URL の同財団ホームページからその活動の概要を知ることが出来る。<http://www.zentomo.or.jp/zaidan.html> (2023年9月4日確認)

¹⁶「全国友の会」の支援活動を紹介するニュースについては「全国友の会」ホームページの下記 URL を参照のこと。<https://www.zentomo.jp/news/> (2023年8月25日確認)

近くにある「友の会」を紹介してもらえとのことであり¹⁷、そして「公共活動」以外の最寄り会をはじめとした「友の会」の活動は、そのホームページの「全国友の会について」の項目で詳しく紹介されている¹⁸。

地域の「友の会」の「家事家計講習会」は、会員以外も参加可能な講習会であるが、「最寄り」という地域コミュニティは、全国にあるので、転勤などで見知らぬ土地で「友の会」の「最寄り」に参加して、その土地に溶け込み「生涯の友」を得て第2の故郷となる。

毎年開催される「友愛セール」に出品する手芸品などの製品やケーキ・クッキーづくりは「最寄り」や「講習会」で習う。針仕事は、様々な支援活動やその手から生み出す製品で、生計を立てることも可能になる。終戦直後に公職追放・失業・引揚・寡婦となった家計を、友の会の「講習会」は支えてきた。

「最寄り」は、現在失われていると言われている地域コミュニティとして、今も重要な役割がある。「最寄り」で培われた人間関係は絆が強い。その強さが「公共活動」にも十分に発揮されている。地域の「最寄り」への参加で、若い世代、特に子育てで孤独しやすい女性たちは、子連れで参加して、家事や家計管理について教わることなど、アドバイスを貰えることは、大変貴重な体験学習の時間でもある。

止む事を知らぬかのような、物価高に悩まされているが、家計簿や家計アプリにはない、羽仁もと子案『家計簿』の目指した思想が、今もこれからも失われてはなるまい。

4. 結び

以上、これまで見てきたように、「全国友の会」を中心とした戦前から戦後にかけての被災者への支援や援護活動については、他に類例をみない活動である。

¹⁷「友の会」への入会については「全国友の会」のホームページの「入会案内」の下記 URL を参照のこと。https://www.zentomo.jp/guide/ (2023年8月28日確認)

¹⁸「友の会」ホームページの「全国友の会について」の下記 URL を参照のこと。https://www.zentomo.jp/about/ (2023年8月28日確認)

政治哲学者の齋藤純一はその著書『公共性』において「公共性とは閉鎖性と同質性を求めない共同性。排除と同化に抗する連帯である。現在提起されている「公共性」の理念は、異質な声に鎖され、他者を排除してはいないだろうか」（齋藤 2000、4 頁）とするが、この「公共性」の理念を体現し、災害支援を中心にその理念の遂行が「全国友の会」の活動であると言えよう。

とりわけ「友の会」の「公共」とは、理屈ではない、自らの隣にいる人や家族のためにできること「共感力」と「隣人愛」の中から育まれてきた「公共」なのである。

本稿を読み返し、友の会の活動は「新約聖書善きサマリア人のたとえ」¹⁹のようではないかと、「友の会」の会員に尋ねたことがあった。帰ってきた答えは「貴女がそう思うなら、それで良いのよ」と。

会員ではないが「友の会」に助けられ、教わり何とか、自立してきた者たちの考えるのが「公共」ではないのか。「友の会」の「家事家計講習会」は、居心地が良いのだと参加者たちは、口を揃えて感想を述べている。

では、長年の「友の会」の会員は、「公共費」に見られる「公共」というものをどのように考えてきたのだろうか。

村川協子²⁰は 2011 年に出版したその著書の中で、日常生活の暮らしの知恵や献立の工夫について記述しているが、公共費について「お金は社会から預かっているものという考え方」を示し、さらに「目的があると家計はかえって引き締まる」として以下のように述べている。

我が家の公共費は月に 2 万円です。公共費というとあまり耳慣れない方も多いと思います。公共費とは、社会に協力するお金です。公共費という

¹⁹ 新約聖書中の『ルカによる福音書』10 章 25 節から 37 節にある、イエス・キリストが語った隣人愛と永遠の命に関するたとえ話である。このたとえ話はルカによる福音書にのみ記されており、他の福音書には記されていない。

²⁰ 村川協子は 1930 年（昭和 5 年）生まれ。結婚と同時に「全国友の会」に入会。多くの仲間と共により良い暮らしづくりを工夫し、講師として「家事家計講習会」に招かれ 300 回以上講演をしている。

考え方は、日本初の女性ジャーナリストで、最初に家計簿を考案した羽仁もと子先生が提唱しました。羽仁もと子先生のお金に対する考え方の1つに「お金は社会から預かっているものである」というものがあります。労働して得た収入のうちいくらかを公に捧げ、社会のみんなで分かち合うという考え方は、昨今の、得たものを誰にも触らせないように溜め込んで安心するという風潮とは逆ですが、素晴らしい考え方だと思っています。私は昔から事あるごとに寄付や募金をしてきました。

社会にお金を還元しようと思うと、生活は引き締めていかなければいけません、そのことが家計にも刺激になって無駄を省くということにもなると思います。(村川 2011、43-44 頁)

このような「友の会」会員の意識や行動で「公共活動」が、今も支えられ、続いている。

「友の会」が公共活動で、関わり支援してきたのは災害・飢饉・貧困・戦争・地震などが、挙げられる。これらを改めてみると「友の会」の公共活動は、すべては今も地球上で、起きている人類の災禍との闘いであり、「友の会」の人々はそれを自然な隣人愛を組織として行ってきたのである。

近年、「公共性」の概念を重視し、さらに「コミュニタリアニズム」の観点を重視してそれに基づく新たな社会を構想しようとする政治哲学者小林正弥は、その著作『コミュニタリアニズムのフロンティア』(2012年)において「リベラリズム・リバタリアニズムが、個々の人の倫理的問題を私的領域に分離して公共の問題から遠ざけ、あくまでも個人を中心に考えているのに対し、コミュニタリアニズムは私的・公共的領域双方において「善き生」と共通性つまり「善」と「共」を重視し、この双方を合わせて「共通善」を政治の重要な目的と考える思想である。」と述べている(小林 2012、8頁)。「友の会」の「公共費」は、コミュニタリアニズム的な公共的活動と理論的に位置づけることが可能であり、この点でも注目に値する。「友の会」はコミュニティが機能しており、自然な形で小林の主張するコミュニタリアニズムを日々実践し、組織化を通して社会へ

の貢献を行っていると言えよう。「友の会」の「公共費」は、コミュニタリアニズム的な公共的活動と理論的に位置づけることが可能であり、この点でも注目値する。

敗戦後も「全国友の会」は、相次ぐ自然災害への救援活動を行ってきたが、その智慧ある活動について、広く信頼と高い評価を受けてきた。

羽仁もと子の亡き後も、変わらず活動を続けており、情報も「全国友の会中央部」へ集まり、外部からの要請により、海外へも活動を広げて行った。

「全国友の会」の国内に留まらず、海外への支援活動について、さらに「全国友の会」の活動をここまで築き上げた羽仁もと子の思想についてさらに考察する必要があるが、それは今後の課題としたい。

(参考文献)

『婦人之友』婦人之友社 1934年12月号

———1935年2月号

———1939年6月号

———1946年4月5月合併号

———1946年6月号

———1946年7月8月合併号

———1946年9月号

———1950年4月号

———2020年8月号

学校法人「スコーレ」<https://www.schole.jp/history/>（2023年1月14日確認）

羽仁もと子（1927）『羽仁もと子著作集』第9巻、婦人之友社

<https://www.city.hakodate.hokkaido.jp/docs/2014010700711/>（2023年6月12日確認）

樋口幸永・近藤隆二郎（2009）「『全国友の会』における家計簿記帳運動の特徴と役割」『日本家政学会誌』60（10）：859-868

北海道社会事業協会編（1937）『函館大火災害誌』国立国会図書館収蔵

一般社団法人農業農村整備情報センターホームページ「水上の礎『津軽で生まれる子らに』」<https://suido-ishizue.jp/nihon/09/05.html>（2024年2月15日確認）

- 経済企画庁 (1976) 『現代日本経済の展開——経済企画庁 30 年史』
- 小林正弥・菊池理夫 (2012) 『コミュニタリズムのフロンティア』 勁草書房
- 小林稔子・平山成美 (2020) 「引き揚げの悲喜を一冊に——福岡の団体が 23 人の手記収録」『西日本新聞』2020 年 10 月 20 日号 <https://www.nishinippon.co.jp/item/n/655975/> (2023 年 9 月 2 日確認)
- 公益財団法人全国友の会振興財団ホームページ <http://www.zentomo.or.jp/zaidan.html> (2023 年 9 月 4 日確認)
- 公益財団法人亀陽文庫「能古博物館」ホームページ
<https://nokonoshima-museum.or.jp/index.html> (2023 年 8 月 10 日確認)
- 国立公文書館アジア歴史資料センター「公文書に見る終戦——復員・引揚げの記録——」
<https://www.jacar.go.jp/index.html> (2023 年 8 月 10 日確認)
- 水谷年恵 (1934) 「函館の大火と女性の活躍」東京朝日新聞 3 月 26 日号
- 三井禮子編 (1974) 『現代婦人運動史年表』 三一書房
- 盛岡友の会 (1935) 『田山村の生活』 (国立国会図書館所蔵)
- 森崎和江 (2016) 『からゆきさん——異国に売られた少女たち』 朝日新聞出版
- 村川協子 (2011) 『簡素な暮らしの家事手帳——老いを心豊かに生きる知恵』 大和書房
- 野本京子 (2005) 「東北農村生活合理化運動前史——戦前期『婦人之友』友の会の実践」『東京外国語大学論集』 71: 127-143
- (2007) 「東北農村生活合理化運動の展開——農村セツルメントの軌跡」『東京外国語大学論集』 75: 171-191
- 齋藤純一 (2000) 『公共性』 岩波書店
- 『友の会レポート』 1934 年第 38 号
- 1935 年 12 月 2 日号
- 『友の新聞』 1967 (昭和 42) 年 5 月 12 日号
- 1970 年 235 号
- 浦頭引揚記念資料館ホームページ <https://www.city.sasebo.lg.jp/siminseikatu/simian/uragashira.html> (2023 年 7 月 19 日確認)
- 渡瀬典子 (2009) 「雑誌『婦人之友』『友の会』活動における 20 世紀後半の農村生活改善——盛岡生活学校と『東北部友の会』」『岩手大学生涯教育論集』 57 (11): 1-11
- 山崎明子 (2018) 『新装版 サンダカン八番娼館』 文藝春秋社
- 全国友の会 (1989) 『農村生活合理化運動: 東北セツルメントの記録——昭和 9 年～

昭和 14 年』全国友の会中央部

全国友の会（2000）『全国友の会 70 年のあゆみ——会員がつづる創立から現在まで』

全国友の会中央部

———（2022）『全国友の会 90 年史』全国友の会中央部

全国友の会ホームページ「公共活動」<https://www.zentomo.jp/volunteer/>（2023 年 6 月 18 日確認）

———「ニュース」<https://www.zentomo.jp/news/>（2023 年 8 月 25 日確認）

———「入会案内」<https://www.zentomo.jp/guide/>（2023 年 8 月 28 日確認）

———「全国友の会について」<https://www.zentomo.jp/about/>（2023 年 8 月 28 日確認）

（むらかみ ふみこ）

（2024 年 3 月 4 日受理）